

令和4年度事業報告

I 公益目的事業

ア 対馬丸記念館の管理運営事業

対馬丸記念館の管理運営に資するよう事業の円滑な遂行に必要な協議を行うために内閣府、県及び厚生労働省（オブザーバー参加）の関係部署並びに対馬丸記念会を構成員とした「対馬丸平和祈念事業協議会」の幹事会（令和4年10月25日）、本会議（同11月30日）を開催した。いかにして来館者を増やして自主財源を確保、もって館の自主運営を実現できるのか、について意見交換した。高良代表理事からは、22年10月19日付の琉球新報に掲載された投稿論壇「国、県の記念館運営願う」に触れ、今後の記念館存続のあり方にも言及した。

（ア）常設展事業

公益財団法人として対馬丸記念館の展示を通して対馬丸事件の歴史と教訓を伝えながら、二度と悲しみを繰り返さない「学びの場」、平和の種を蒔く施設として引き続き平和の発信に努める必要がある、その実現に向けて記念館の改修等により、館内環境の改善と来館者の安全確保を図った。

・空調設備取替え工事	企画展示室クーラー3基	1,940,000円
	1階展示室クーラー2基	1,243,000円
・シャッター座板感知装置取替え工事		220,000円
・冷水機撤去 壁コンセント修繕工事	1階展示室	72,600円
・記念館外壁照明器具取替え工事	1カ所	59,400円
・屋上床面洗浄作業		27,500円

（イ）特別展事業

①第38回特別展「沖縄の疎開と本土の疎開」
滋賀県の平和祈念館から本土の疎開に関する資料を借りて展示した。

沖縄の疎開と本土の疎開を対比して展示を行う。沖縄の疎開は海を渡って今まで行ったことのない場所、雪や汽車などの見たことのないものも見れる、と子供たちははしゃぎとても楽しみにしていた。本土の場合も汽車に乗り、親に見送られ、疎開先では現地の人々から駅前でも出迎えられ歓迎された。しかし、本土の場合は東京、大阪などの都会から田舎への疎開だったため「なぜ」という疑問を持つ子どもや、親から離れたくない子供が多くいた。そのため、沖縄の疎開は初め子供たちにはとても楽しみなものだったが本土の子供たちにとってはそうではなかった。学童疎開といえば「ひもじい、寒い、さびしい」が代表的に言葉です。沖縄の方言では「やーさん、ひーさん、しからーさん」と言います。1944年の冬は60年ぶりの大雪でかなり苦しい時期でした。ご飯も少なく、親にも会えない彼らはどのように生活していたのか疎開先では実際にどのような想いをしたのか。写真資料や文書資料から読み解き沖縄と本土の学童疎開を対比して見てほしい。

沖縄の学童疎開と関西の学童疎開を対比し、国が推進した「学童疎開」の実相について多角的な視点で伝えた。当時の子どもたちがどのように生活をし、物資不足で満足に食事もできない時代に長期間親元を離れた生活を振り返ることで平和の尊さを発信した。なお、新型コロナウイルスの第7波により県内では1日当たりの感染者数が6,000人を超える時と重なり、当館職員でも陽性者が複数確認される事態となった。例年は8月22日から開催するが、コロナの影響でずれ込む事態になった。

開催期間：令和4年9月9日（金）～10月2日（日）21日間
鑑賞者：571人（県内209人、県外356人、国外9人）

②「第70回全琉図画・作文・書道コンクール那覇秀作展」

沖縄タイムス社協力のもと、同社主催コンクールにて「全琉図画・作文・書道コンクール」の入選者のうち、対馬丸戦没者の学童の後輩に当たる那覇市内小・中学校の児童生徒の図画、作文、書道を平成24年度より当館にて。「那覇秀作展」として展示を始めた。この展示会を通して感性と知性の調和のとれた子供たちの成長を促すとともに、子供たちの表現豊かで生き生きとした作品から、地域や学校、子供たち等多くの人々と当館を繋げることにより、改めて平和の大切さを感じてもらい、多くの人々に来館の機会をつくり、もって対馬丸事件への理解を図った。

開催期間：令和4年12月21日（水）～令和5年1月25日
（水） 27日間

鑑賞者：852人（県内475人、県外353人、国外22人）

（ウ）対馬丸及び学童疎開に関する調査・研究事業

対馬丸事件や学童疎開の歴史に関する証拠資料の収集に努め、戦前、戦中、戦後の国の動向や社会情勢を調査研究し、常設展及び特別展の展示資料の充実を図った。対馬丸記念会が発刊する各種刊行物、通信の基礎資料として活用した。

（エ）来館促進支援事業

対馬丸事件の史実と教訓を広く世の人々に伝え訴えるという記念会の目的を達成するための活動の拠点として設置した対馬丸記念館を維持し、今後もこの活動を続けていくため、来館促進活動を行ってきた。記念館訪問については、沖縄県内小学校108校に記念館案内パンフレット・小学生向けワークブックを送付し、平和教育の機会を提供し、来館を呼びかけた。

また、令和4年10月30日～11月3日に行われた「世界のウチナーンチュ大会」の会場のインフォメーションセンターで英語版の案内パンフレット300部、中国語版100部、韓国語版50部の配布を依頼した。その効果もあり、ウチナーンチュ大会期間中にハワイ沖縄県人会の団体を中心に320人が来館した。その際には受付担当者が英語で説明を行ったが、手助けとして非常に役立ったのが前年令和3年度に導入したデジタルサイネージだ。一度に50人余りの外国人の入館が続いたため、1階・2階の展示室にそれぞれ1基設置されているデジタルサイネージで、説明員の不足を補った。今後もさらなる活用方法を考えていきたい。

展示については、令和4年度は「遺影修復事業」が大きな取り組みとなった。当館で展示している遺影は昭和戦前期の写真のため傷みが激しい。かねてより遺族からの強い要望のあった80枚の遺影を修復した。

修復後は当館SNSやホームページを通して、遺族関係者のみならず幅広い層に来館を促していきたい。加えて今年度の新規の遺影追加は3人、館内展示の刻銘の追加・修正は8人である。戦後78年を迎えてなお新規の追加や、来館時に名前の漢字等の修正の申し出があることに、記念会側も遺族に対しての呼びかけや関わりを深める必要がある

と痛感した。

・遺影修復事業	80 枚	1,668,832 円
・新規遺影追加	3 人	39,820 円
記念館内展示刻銘追加・修正	8 人	
・令和4年度入館者数	添付資料	

イ 対馬丸戦没者の追悼と遺族等の福祉の向上並びに地域住民との交流促進

(ア) 対馬丸戦没者の追悼と慰霊祭の実施

前年度から続く新型コロナウイルスの流行の影響で、事件から78年目となる8月22日の慰霊祭も代表理事と副理事長、常務に加え、館職員だけの参加とした。一般参加者、来賓なしの簡素化し、参列者よりも報道陣が多い状況であった。焼香の際、焼香の呼び掛けに応じた報道陣も手を合わせた。「対馬丸慰霊碑」のある十島村悪石島や「対馬丸慰霊之碑」のある奄美大島宇検村ではそれぞれ住民や児童・生徒により慰霊碑が守られており、今年も慰霊祭が行われた。当館からもお礼の品などを送った。一方、新型コロナの影響のため、奄美現地への職員派遣は見送りとなった。

(イ) 語り部事業

対馬丸事件の史実とその教訓を風化させないために、対馬丸の生存者や遺族等の語り部による講話を引き続き行い、県内外の小・中学校はじめ各種団体などからの依頼に応じて出張講話も115件の実施となった。また、新たな語り部活動の希望者に対して育成講座も実施中である。

ウ 相談事業

今年度の遺族相談事業は、3年ぶりに遺族宅への訪問調査を中心に行ったが、遺族自身も高齢のため、約束した日時を体調の理由でキャンセルや延期になることも多く、遺族相談者数は12人とどまった。しかし、遺影提供者や来館時に遺族と名乗り出る方、「垣花小学校平和のモニュメント」除幕式への招待遺族のリスト作成中に新たな遺族の存在が分かり、遺族に対しての呼びかけや掘り起しの必要性を感じさせられた。

また来館される遺族の方には、子どもや孫を伴ってくる方も多く、その姿からは自らの経験を身近な人に伝えたいという思いが感じられる。その思いを汲み、遺族ご本人から、子どもや孫など次世代へと繋いでいけるような働きかけを考えていきたい。相談者数 12人。

エ 講習会及び遺族と地域住民との交流促進

遺族等が健康で不安なく生活していけるよう、医療関係者や各界の専門家等を講師として招聘し、「ちゃーがんじゅう講座」を開催した。

(ア) テーマ「講談で語る対馬丸 ～今こそ平和への願いを込めて～」

講師 講談師 旭堂南照 ・ 琉球舞踊 瀬名波真由美

期日 令和4年6月18日(土)

参加者 70人

(イ) テーマ「長寿を支えた伝統的な琉球料理は沖縄の宝」

講師 安次富順子(元沖縄料理師専門学校 校長)

期日 令和4年11月5日(土)

参加者 70人

オ 広報活動

広報誌「対馬丸通信」を年2回発行し、遺族や生存者、協力会員、支援者などに配布し、記念館での催し物や慰霊祭の様子、第一回学童疎開体験事業の研修についての報告など、対馬丸記念会の活動や対馬丸記念館の運営状況を広報した。

活動を周知するため、総合事務局など関係行政機関や県議会議員及び那覇市議会議員、沖縄選出の国会議員に配付した。その他、ホームページやツイッターのさらなる活用をはじめSNSの積極的な利用で、記念館のイメージアップに努めた。

(3) 子どもたちに対馬丸の悲慘な歴史を伝え平和を発信する事業

ア 子どもたちの平和学習推進事業

(ア) 平和学習推進委員会の開催

対馬丸記念館を拠点として、戦争の悲慘さと平和の大切さを学習し子どもたちが主体的に取り組んでいく機会を設定するため那覇市教

育委員会指導主事、那覇市内の小・中学校の平和教育担当教諭、ひめゆり平和祈念資料館職員、対馬丸記念会代表理事を委員とする「平和学習推進連携委員会」を10月26日と2月1日に開催し、平和教育研修会や平和学習作品展などについて協議・実施した。

(イ) 那覇市内全小中学校平和教育研修会

平成25年度より那覇市教育委員会と共催している、那覇市立小中学校54校の教諭を対象とした研修会2回を実施した。5月12日の研修会において、現在は浦添中学校教頭で、前任は沖縄県教育庁文化財課資料編纂班指導主事の大城邦夫氏を講師に実施した。8月の第2回研修会も当館で開催予定だったが、コロナの第7波の状況を受け、急きょ館内実施を取りやめ、常務らが出演する館内案内の動画撮影に協力した。

(ウ) 学童疎開体験事業

疎開した学童が体験した「やーさん、ひーさん、しからーさん（ひもじい、寒い、さびしい）」を那覇市内の小学生が追体験するというテーマの下、戦争の悲惨さと平和の尊さについてより深く考えてもらうために実施した。11月26日から事前研修を開始し、渡嘉敷島における本研修を12月26日から2泊3日の日程で実施した。1月15日から事後研修を重ね、1月29日に参加した児童20人が那覇市牧志のほしぞら公民館で研修成果を発表した。ロシアとウクライナによる戦争が起こり、その疎開者が沖縄や日本で生活している現状の中、疎開体験の参加児童は平和の尊さを実感し、多くのメッセージを発信していくことが期待できた。

(エ) 沖縄本島中部・北部地域の対馬丸事件継承事業

対馬丸事件で多くの犠牲者を出した学校、地域は南部地域、主に那覇市内の学校、地域である。しかし、全体の犠牲者の40%は中部北部地域で占めており、南部の犠牲者数（全体60%）には及ばないものの、沖縄市や名護市では、学童・一般を含め150名以上の犠牲者が出ている。また、沖縄本島の中部・北部地域は、対馬丸事件で数多くの犠牲者を出した学校、地域があるものの、対馬丸記念館のある那覇市から離れており、平和学習等、館の活用が比較的難しい状況にある。館としては、該当地にも対馬丸事件の実相を伝承し、連携を強化したいと考えている。

該当地における対馬丸事件で犠牲者を出した学校は、国頭村で2校（辺土名小、安波小）、名護市で7校（東江小、真喜屋小、瀬喜田

小、名護小、羽地小、屋我地ひるぎ学園、屋部小)、本部町で1校(本部小)、金武町で1校(金武小)、読谷村で1校(古堅小)、嘉手納町で1校(屋良小)、沖縄市で2校(越来小、美東小)、うるま市で2校(具志川小、伊波小)あり、これらの学校、所在する地域に対馬丸事件を継承し、かつ、繋がりをつくる事業を展開した。

- ・ 4月～5月 … 事業実施予定の越来小学校と美東小学校との打ち合わせを行った。主に当日の流れの確認や平和学習に関する要望、提案等
- ・ 6月 … 講話実施。各校の講話について記録をまとめた。(越来小6月16日、美東小6月21日)
- ・ 7月～11月… 来年度は名護小学校と古堅小学校にターゲットを絞り、事業展開できるよう、対馬丸と越来小学校の繋がりや、戦前の越来国民学校について資料収集、作成作業。
- ・ 1月～2月 … 資料作成最終段階。実際に小学校を訪問した際、どのように講話を提案するか、今まで行ってきた講話の展開や紙芝居等の教材を紹介する資料を作成した。
- ・ 3月 … 小学校の平和学習担当教諭に連絡。対面での事業紹介等は行えなかった。また、来年度の準備が忙しいということで、やり取りは3月以降になる可能性がある。引き続き連絡を取り、学校と相談を重ねる。

今回講話を行った美東小学校と越来小学校では、どちらも「地元や学校と対馬丸事件の繋がり」を中心に展開した。

また、実際に亡くなった学童の遺族に関する資料を基に講話資料を作成することで、犠牲者・遺族の気持ちをより身近に感じてもらったのではないかと感じた。

さらに、平和学習担当教諭を通し、記念館への見学の誘致や平和学習の取り組みに関する意見交換を行うことで、今後の記念館との繋がりを作るきっかけになると考える。

現在、名護小学校、古堅小学校、美東小学校の3校と打ち合わせを重ね、各校6月中に講話を行う予定である。特に、今年度は北部地域の学校でも講話を展開するため、今回が北部地域の学校と記念館の繋がりとなるよう努めていきたい。

(オ) 平和学習補助教材制作事業

対馬丸記念会は2019年から平和学習補助教材の制作を行ってきた。今年もデジタル教材を製作する。

平和学習推進連携委員会から平和学習補助教材に関して「対馬丸事件のその後、疎開や十・十空襲などの教材もあると、対馬丸と関連した学習ができる」と意見があり、今年は疎開をテーマに補助教材を制作している。

学童疎開に詳しい琉球大学の中村春奈准教授の資料提供を受け、パワーポイント教材に活用していきたい。

2022年夏の特別展示会では学童疎開をテーマとし、県内・県外の疎開について学び、県外の資料も借りることが出来たのでパワーポイント教材の内容に活かす。さらに、沖縄各地の市史や町史などを活用して補助教材の制作を進める。

(カ) miniDV デジタル化及びWEB サイト公開事業

対馬丸記念館開館以来、平和関連のイベントや事業、対馬丸事件や疎開に関する証言などをVHSやminiDV、カセットテープに記録し、多数保管している。本事業では、時代とともに進歩していくデジタル環境に対応し、将来的に平和学習の推進に活用していくことを目的とするため、このような音声、映像データをデジタル化した。

イ 子どもたちによる平和活動発信事業

毎週土曜日の「つしま丸児童合唱団」の活動を引き続き実施した。

対馬丸記念館の理念を多言語で発信するため、英語学習の要素も取り入れた子どもたちが日常的・主体的に平和発信活動ができるよう「平和のひろば」コーナーを設置、活用し、子どもたちが平和学習で作った作品・成果物を展示し、子どもの視点からの平和発信の場とした。

II 収益事業「物品販売・会議室賃貸事業」

事業として、対馬丸記念館の敷地内に自動販売機3台を設置し、販売手数料として販売額の20%を受け入れている。

また、館内で販売している書籍「対馬丸 沈む」（上原清著）の売り上げは全額寄付、小説「対馬丸」（大城立裕著）も売り上げの一部（一冊630円で仕入れ、700円で販売、差額の70円を寄付）、「DVD 沖縄戦」も5,000円のうち2,500円を寄付として、書籍「マンガで伝える沖縄戦」

（琉球新報社刊）は販売価格1,760円のうち、528円（30%）を受け入れ

ている。

記念会刊行の公式ガイドブック（1,000円）など、これらを積極的に販売していく。

Ⅲ その他事業「旭ヶ丘公園周辺緑化事業」

旭ヶ丘公園内には当記念館の他、小桜の塔、海鳴りの像などの慰霊碑、顕彰碑が多数設置されており、本県の歴史・文化を知り、平和を祈念する那覇市の公園となっている。

同公園を慰霊、平和を祈念する地域としてふさわしい場所にするため、対馬丸記念館や小桜の塔周辺の緑化に努める。

本年度は、外部ボランティアが利用する清掃道具などをそろえる。

Ⅳ 法人会計「管理事業」

対馬丸記念館の管理運営を適正に行うために、対馬丸記念会の理事会及び評議員会の開催、諸規程の改正や庶務経理業務を実施している。

Ⅴ 那覇市立垣花小学校における対馬丸平和のモニュメント事業

対馬丸事件で最大の犠牲者（101人）を出した那覇市立垣花小学校（当時は国民学校）において、校内に対馬丸平和のモニュメントを建立しようとの動きが有志から広がり、記念会でも最大限協力しようということになった。7月13日、建立除幕式を実施した。取り組みは大きく報道もされた。

関連費用は、特定費用準備資金から充てた。